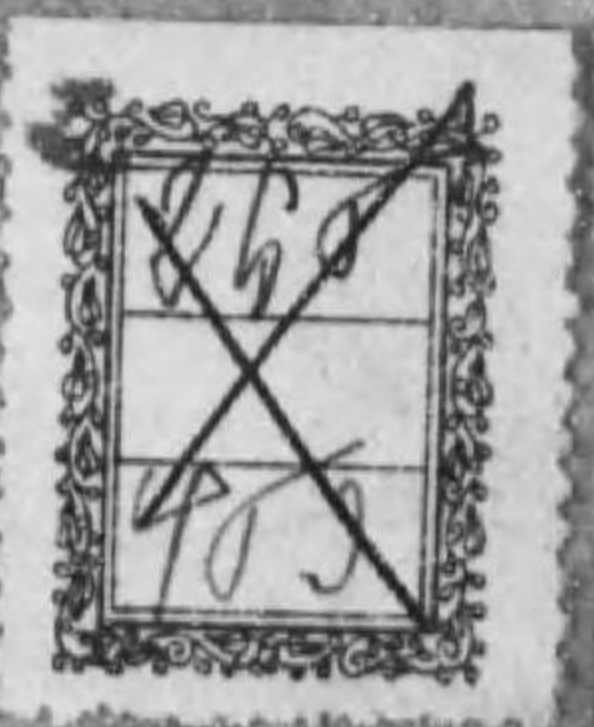


西行櫻

特113

889



始





83113  
889



役別

西行櫻

内之部卷之十ノ四

装

東

附

所

季

			ワ ツレ 花見の都人	ワ キ 西行法師	シ テ （櫻 の精）人
			素袍男四五人	大口僧	〔面〕舞尉 舞小尉にても 襟 黒風折 白垂 着附厚板 色大 口 單狩衣 腰帶 扇 床几

目番四  
(目番三)

種別

山西都京

月



西行櫻一



解説

始め囃子方座着き、作物引廻しかけ、シテ中に入りて大小前へ出し置く。  
夫よりワキ出で、ワキ座に行き床几、狂言とセリフあり、右終つて次第打出す。  
ワキツレ出で、舞臺に入り向き合ひ諺ふ。

一 狂言とセリフありて皆板付きへくつろぐ。夫よりワキ。サシを諺ふ  
「頃待ち得たる櫻狩」 此處さらりと諺ふべし。名宣、道行同断。着詞済み、何れも橋懸へ行き

二 「夫春の花は上求本来の……」 此諺位あり。狂言のセリフ済み、

三 「およそ洛陽の花ざかり」 と、氣を變へ諺ふ。

同 「あの柴垣の戸を開き内へ入れ候へ」 此詞は狂言へかり諺ふ。と、狂言ツレを呼び出す。

ツレ立ち向ふ。狂言サラ／＼と詞あり、ツレ何れも 『櫻花咲にけらしな……』 と、

諺ひながら舞臺に入り、ワキへ向き下に居る。以下懸合宜しくありて、

五 「あたら櫻の」 と、此地しつとりとつけて諺ふ。此地の中にワキツレ何れも切戸より引き、作物

引廻し下す。

六 「埋木の人知れぬ身と沈めども」 此處位ありて諺ふべし。以下懸合種々緩急變化あれども

口傳なり。

八 「はづかしや老木の」 此地靜かにつけて諺ふ。 『凡心なき草木』 の所にてシテ、作物

より出で、ワキへ向ひ下に居、合掌。

九 「鳥林下に啼いて涙つきがたし」 此所にてシテ、立ち、くつろぐ。

十 「それ朝には落花を踏んで……」 此地はかゝつてつける。是より以下シテに種々形あれば見

計ひ諺ふべし。

十一 「花に清香月に影春の夜の」 と、序ノ舞。キリはシテに形多し、見計ひ諺ふ事勿論なり。























































終

